

令和7(2025)年度 国際文化研究科（修士課程）9月入試

試験科目名：日本語教育

【出題の意図】

日本語教育と研究方法に関する基礎的な知識の理解を問う問題です。日本語教育に関する基礎知識は、英語教育や言語学一般を含み広範囲に渡りますので、偏りなく広く学んでいるかを問う問題です。研究方法に関する基礎的な知識は、量的・質的研究方法の違いと特徴に関する理解を問い、大学院で日本語教育を研究する前提としての知識を問うものです。

【解答例】

〔I〕 次の(1)～(5)について、日本語・中国語・英語のいずれかで説明しなさい。

(1) can-do statements

「～できる」という形式で、外国語を使って何がどれだけできるかを具体的に示した「能力記述文 (Can-do descriptors)」をリスト化したもので、学習者が自分の言語能力を客観的に把握し、具体的な目標を設定・評価するために使われる。日本語能力試験 (JLPT) や英検、CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) など、様々な言語テストや教育現場で学習の到達目標や進捗確認に活用されている。

(2) word order

言語学において、文や句の中で単語や形態素 (意味の最小単位) が並ぶ順番のことで、言語によって「主語-動詞-目的語 (SVO)」「主語-目的語-動詞 (SOV)」などの基本的なパターンがあり、文の意味や構造を決定する重要な要素である。語順は統語論 (syntax) で扱われ、英語 (SVO) と日本語 (SOV) のように言語間の大きな違いの要因となり、文法やコミュニケーションに影響を与える。

(3) communicative approach

コミュニカティブ・アプローチ (Communicative Approach) は、言語を「使うこと (コミュニケーション)」自体を目的とし、実際の場面で役立つ「コミュニケーション能力」の育成に重点を置いている。フォーカス・オン・フォームの外国語教授法であるが、フォーカス・オン・フォーム S の教授法に比べ、機械的な練習より意味の伝達や流暢さを重視し、インフォメーション・ギャップを埋めるタスクやロールプレイングなどを通して、目的や状況に合った言語運用能力を養うことを目指す。

(4) interlanguage

Interlanguage (中間言語) とは、第二言語学習者が目標言語を習得する過程で、母語

(L1) と目標言語 (L2) の間に形成される独自の言語システムである。学習者の誤りはランダムな間違いではなく、独自の体系的ルールを持つ過渡的システムであり、学習者の母

語の影響を受けつつ目標言語に近づこうとする中で徐々に変化・発達していく。Selinkerが提唱した概念で、学習者の言語を欠陥ではなく発展的なプロセスとして捉える。

(5) high context culture

ハイコンテクスト文化とは、言葉だけでなく、文脈（空気、表情、声のトーン、関係性など）に大きく依存して意味を伝えるコミュニケーションスタイルを持つ文化で、最も典型的なのは日本の文化であるとされ、日本では「空気を読む」「阿吽の呼吸」など、その場の雰囲気や言外に読み取ることが重視される。日本、中国、中東、南米などがこれに該当し、直接的な表現を避け、暗黙の了解や察し合いを重視するが、ローコンテクスト文化（米国、西欧など）では言葉そのものを重視し、明確な説明を求める。

[II] 次の(1)~(5)のうち1つ選んで、日本語・中国語・英語のいずれかで、例を挙げて説明しなさい。

(1) positivism

実証主義(positivism)とは、経験や観察に基づいて得られる事実のみを真実の知識の源泉とし、形而上学的な考察や主観的な経験を排除する哲学的な立場である。社会科学ではこれは社会現象を自然科学のように客観的に研究しようとする思想で、19世紀にコントにより体系づけられた。例えば、「女性は男性より外国語が得意だ」という仮説について実験やアンケート調査などで統計から証明する方法である。

(2) qualitative research

質的研究(Qualitative Research)とは数値で測れない人々の感情、経験、価値観などを深く理解するために言葉や観察データ(インタビュー、日記等)を用いて「なぜ」を解明する研究手法である。量的研究が「何を」「どれくらい」を数値で分析するのに対し、量的研究では、例えば、ある人が異文化に適応する心理的变化の過程など、見えにくい側面や複雑なプロセスを明らかにし、新たな発見や仮説生成に役立つ強力なアプローチである。

(3) reliability/validity

信頼性(Reliability)は同一対象に同じような調査を繰り返しても一貫した結果が得られるかどうかの精度、妥当性(Validity)は調査設計・調査手法が調査目的に対してどれだけ適切に設定できているかを表す指標である。体温計が毎回同じ温度(36.5°C)を示すなら信頼性は高いが、実際は37.2°Cなら妥当性は低い。

(4) critical ethnography

批判的民族誌(Critical Ethnography)は、伝統的なエスノグラフィーの研究手法に批判理論(Critical Theory)の視点を導入した質的調査手法である。単に文化や社会現象を記述・理解するだけでなく、社会における権力構造、抑圧を批判的に分析し、社会変革を促すことを目的とする。例えばメディアに現れる言葉遣いを分析し、それがどのように「男性/女性」「多数派/少数派」といった権力関係を生み出し再生産するかを解明する。

(5) postcolonialism

ポスト・コロニアリズムとは植民地支配が終わった後も続く、政治的・経済的・文化的な影響を研究する思想や理論である。これは、植民地主義（コロニアリズム）に代わる新たな秩序や状態を指すだけでなく、植民地支配が残した支配と被支配、搾取と被搾取といった構造的な関係性が独立後も形を変えて続いていることを批判的に分析する。例えば、カナダ、オーストラリア、台湾などの先住民問題やマイノリティ差別の構造分析など。